

吉祥院六齋歴史研究会「獅子の如く」の記念誌発刊にあたって

# 京都の伝統芸能 六齋念仏踊り

京都六齋念仏保存団体連合会  
会長 橋本 治夫



Haruo Hashimoto

吉祥院六齋歴史研究会「獅子の如く創刊号」の発刊、おめでとうございます。

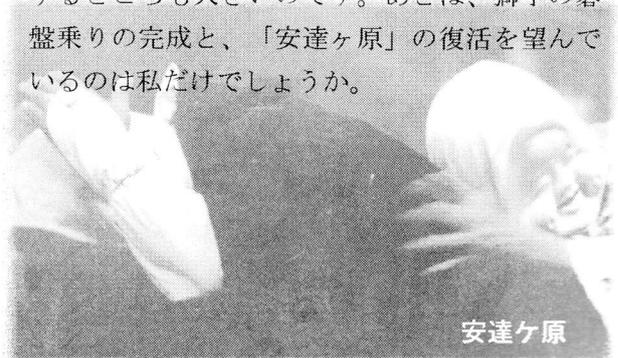
私ども京都六齋念仏保存団体連合会は、連合会の中心的な会員である吉祥院六齋保存会の活躍を常に支援し、吉祥院天満宮の春季大祭・夏季大祭に於ける吉祥院六齋の一般公開に、毎年のように観客に溢れた盛況を心から喜んでおります。京都六齋念仏保存団体連合会は、六齋が国の“記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財”に選択を受けた昭和54年度に結成され、その初代会長に吉祥院六齋の山中弥一郎会長にご就任頂いて、昭和58年の重要無形民俗文化財の指定を受けることができ、その後、いくつかの団体の興廃はありましたが、現在加入されている会員は、念仏系が4団体、芸能系が10団体（うち「桂六齋」だけが現在休止中）となっています。

この吉祥院地域は、戦後には、8団体が天満宮の大祭に2日に亘って奉納され、戦後には、5団体が復活して活躍するという事で、京都市内で六齋でいえば「吉祥院」がその代名詞ではないかと言われた時期もありました。

私が中学生のときには、中堂寺六齋のその時代の副会長に連れられて、吉祥院天満宮の夏季大祭には、夜7時頃から最後のステージまで、毎年見に来ていたものです。特に、最後に出演する南条組みなんじよの「四つ太鼓」や「祇園囃し」の太鼓扱いが如何に熟練されているかといったことを、当会の年寄から教えられましたが、私はその頃から「安達ヶ原」の大太鼓と豆太鼓の打ち分けや、笛の旋律に乗って踊る2人の修行僧の所作が大好きで、この「安達ヶ原」が始まるとワクワクして見ていたものでした。それで平成

19年度に行われた『第38回「京の郷土芸能まつり」大集合！京都の六齋念仏』には、吉祥院六齋として「四つ太鼓」の地に「安達ヶ原」で出演していただきました。

戦後、昭和40年近くになって、吉祥院地区が住宅開発により、市街地化して行くとともに、演技者不足で東条・西条・北条・石原の各組が次々とリタイヤして行き、最後にただ一つ菅原組だけが残るのみとなったが、菅原も他と同様に危機を迎えかけたときに、吉祥院小学校の教頭先生が「吉祥院子ども六齋会」を立ち上げられ、これによって危機は回避できたのですが、その後もこの地区の市街地化が進み、5~6年前に8月の夏季大祭の直前になっても練習に若者が集まらないという状態がって、六齋の見せ場である「四つ太鼓」は、吉祥院子ども六齋会だけの出演となり、若手が太鼓の技を披露する「祇園囃し」は5分ぐらいで終わるといった吉祥院の太鼓技を見にきた観衆を失望させた時期もありました。これに加えて、吉祥院の太鼓芸のエース長岡氏のご逝去という不運がありましたが、最近若手で長岡氏に匹敵するような技を持った会員や、篠笛の名手も出てきたようで、毎年夏季大祭を見に行っている私が今後期待するところも大きいのです。あとは、獅子の基盤乗りの完成と、「安達ヶ原」の復活を望んでいるのは私だけでしょうか。



安達ヶ原